令和７年度　中学生の「税についての作文」
緑県税事務所長賞

当たり前の裏にあるもの

横浜市立 みたけ台中学校　第三学年　柳澤　花

「エアコン、ありがたすぎる！」教室に入った瞬間、思わず口にした。今年の夏は本当に暑い。もしこれがなかったら、授業に集中なんてできなかったと思う。でもそのとき、ふと考えた。「これって、誰が払っているんだろう？」電気代も、設置費用もタダじゃない。

私は今まで、税金にあまりいいイメージをもっていなかった。買い物をしたとき表示より高くなるのが嫌だったし、「なんでこんなにとるの？」と思っていた。けれど、あとで調べてみて、学校にある多くのものが税金でまかなわれていると知った。エアコンも、教科書も図書室の本も、体育館の床も。見渡せば当たり前のようにあるもののほとんどが「誰かの税」でできていたのだ。

ある日、夕ごはんのとき、何気なく「税金って高すぎじゃない？」とこぼしたら、お父さんが言った。「花が小さいとき、熱出して救急車に乗ったことがあるでしょ？あれも税金で動いているんだよ」。その言葉にドキッとした。自分のために走ったあの車も、見えない誰かの税金が支えてくれていたなんて、思ってもいなかった。その少しあと、学校に講師の方が来て、税について話してくれた。

「税金は今を支えるだけではなく、未来のバトンでもあります」と言っていたのが印象に残っている。道路や橋、学校など、長く使われているものに税が使われていると知り、「税って未来をつくるしくみなんだ」と感じた。話を聞いたあと、私はふと、公園のブランコや図書館の本、通学路の信号まで思い浮かべた。全部、子どもの頃から自然に使ってきたものばかり。でも、その裏には、見えない誰かの支えがあったんだと気づいたら、不思議と世界の見え方が変わった。

私はまだ働いていないけれど、買い物をするたびに消費税は払っている。少しだけど、それでも社会を支える側の一人なんだと思うと、ちょっとだけ誇らしいような、不思議な気持ちになった。そして、将来もっと大きな税を払うようになったとき、「なんでこんなにとられるの？」じゃなくて、「これで誰かが助かるなら」と思える自分でいたい。

「エアコン、ありがたすぎる。」もう一度そう思った。でも、今はただの冷たい風じゃない。その風の奥に、いろんな人の思いや支えがあることを私は知っている。